

Title	道教概説(小柳司氣太著, 世界文庫刊行會發行)
Sub Title	
Author	橋本, 増吉(Hashimoto, Masukichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1925
Jtitle	史学 Vol.4, No.3 (1925. 8) ,p.151(463)- 152(464)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250800-0152

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

亡びてしまつた日本の古語が、いまなほこの地方で完全に残つてゐることで、單に言語といはず、信仰風習に於いても古代日本民族のそれを反映するものが多く、南島研究の重要なことを立證するものであつて、近時漸くさかんならんとしつゝあるこの方面の貴重なる收穫の一である。（以上三項、松本芳夫）

道 教 概 説（小柳司氣太著）

支那の文化で古來我々に最も親しみがあり、従つて我々の文化的生活中に最も著しい影響を及ぼしものはいふまでもなく儒教である。實に儒教の思想は現在に至るまでなほ常に強大なる力を我の生活に加へてゐるので爲めに我が國人はともすれば儒教の思想を以て支那思想の全班なるが如き誤謬、少くともその重要なものなるが如き誤解に陥り易い傾向を有するのであるが、而も事實上儒教の思想を以て常に所謂支那思想の全部或はその重要ななるものとして考ふべきでなく、却つて支那民族の眞の思想は道教の思想によりてより多く代表せられてゐる場合が多いのである。然るに我が學界に於ては古來餘りに儒教を尊崇せる結果、支那思想の研究は即ち儒教思想の研究なるが如き錯誤に陥り、眞に支那民族を知る上に於てなほ一層重要な道教の研究に至つては多く棄てゝ之を顧みず、而もその實際の支那を目撃するに及び、餘りにその期待に反するものあるに驚くのである。思はざるもまた甚しと云はなければなるまいと考へる。

然るに近時漸くその非か悟り、多少道教の研究に志すものを生じたやうで、例へば曩には妻木直良氏の論文「道教の研究」、東洋學報などの發表を見たのであるが、その後小柳博士は飯島忠夫氏と協力し、世界聖典全集の一篇として「道教聖典」と名け、道教關係の書中抱朴子内篇、太上感應編等五種を撰びて國譯せられ學界の注目を引いたのである。而も博士の研究心はもとより之れを以て満足すること能はず、更に進んで大に道教の研究に没頭して古來我が國の學者が殆んど放棄して顧みなかつた、未到の荒野を開拓するに努力して居らるゝのである。而してその努力の一端として現はれたのは、即ち世界文庫の一篇として著はされた「道教概説」である。もとより世界文庫の性質上紙數に著しい制限があり、僅かに百頁餘の小冊子にまとめなければならないのであるから、到底十分なる解説を加ふる能はざることは云ふまでもないことで、既に博士自ら「道教概説は一冊の著述といふよりも、寧ろ小論文ともいふべきものにして、道教のあらゆる問題につき、ただ其の要を提ぐるに止まりて、未だ玄を鉤せず、引いて之を伸べ類に觸れて之れを長ずることは、之を後日に期せり」といひ、すなはちその後哲學雑誌上に「道教と眞言密教との關係を論じて修驗道に及ぶ」といふ題下に、道教と我が國の修驗道との關係を論じ、博士が不斬の努力の一端を洩らされたのによりても、略々所謂「道教概説」の内容性質を察することが出来るのである。要するに「道教概説」は博士が將來更に進んで努力考究せらるべき、道教研究の要目として認むべきものであり、従つてこの方

面の研究に志す學者の要目としても、また道數について一般的の概念を得ると欲する人々にとりても、正にその要求に應すべき著作と稱すべきであらう。敢て江湖に薦むる所以である。(橋本増吉)

歐洲文明史 (松本芳夫譯)

近世佛蘭西が生んだ偉大なる史家フランソワ・ピエル・ギヨーム・ギゾーの名著「歐洲文明史」が今回松本芳夫氏によつて邦譯せらるるに至つた。

史家として非凡であつたギゾーは、或は文學者として、或は政治家として、或は雄辯家としていたく傑出し、その高邁周洽なる觀照と博大深刻なる把握の下に生れたる名篇の數々は學界の均しく賞讃措く能はざるところのものである。

本書は彼がソルボンヌ大學に於て得意の雄辯を振つて講じたる文明史である。炬の如き史眼と犀利なる觀察とを以て人間の外的狀態即ち社會の發展を検討したる一大雄篇であり、全篇は十四講を以て完結してゐる。

第一講に於て著者は講義の題目に歐洲文明史を撰んだ理由を述べる。即ち著者は言ふ「もはや年末餘日もなくなつた。余自身将へのべんとする講演について沈思默考するを得た時間は更に僅かであつた。余は吾々に殘された極めて僅かな時日の間に於て或はまた余に準備するやうに與へられた僅かな時日の中において如何なる題目を限るのが最も良くできるかといふことを求めた。

而して文明の發達と關聯せしめて考察したるヨーロッパ近代史の概觀、即ちヨーロッパ文明の歴史その起原、その進歩、その目的その特徴の概要が、吾々の自由になし得る時間に當てはまるやうに思はれた。從つてこれが余が諸君に講ぜんと決定せる題目である」と。(二頁—三頁) 次に文明を構成する主要なる要素は二つの事實即ち社會的活動の發展と個人的活動の發展、社會の進歩と人類の進歩であると述べてゐる。(十六頁) 而して本書に於て彼は社會的活動發展の考察を眼目としてゐる。第二講に於てはローマ帝國滅亡期に於けるヨーロッパの狀態を考察し、更に古代世界に傳へられたる文明の要素が如何なるものであつたかを制度、信條、思想及び感情の中に研究してゐる。第三講に於ては所謂野蠻時代即ち蠻族侵入の混沌が持續した時代を述べてゐる。

著者は言ふ。「この異様な時代はどれだけの期間に亘つたであらうか。その起原は極めて明かである。それはローマ帝國の滅亡とともに始まつたのである。けれどもその終つたのはいつであつたらうか。この問題に答ふるために、この社會狀態が何に基因するか、この野蠻狀態の原因が何であるかを知らねばならぬ。」

余は主要な二原因を認めることが出来ると思ふ。一は物質的原因で事件の進行につれて外部から發生したものであり、他は道德的原因で内部から即ち人間自身から發生したものである」と。(七十頁) 此の時代に於て人間、財産、及び制度が不安定なる狀態にかれたのは、彼の見解によれば、蠻族侵入の持續といふ物質的原因と蠻人に特有な個人の利己的感情といふ道徳的感情に歸因す